

第15回 日本在宅医学会大会 プログラム別 詳細情報

カテゴリー	シンポジウム
共 催	エーザイ株式会社
タイトル	認知症の人の生き方に向き合う
日 時	平成 25 年 3 月 31 日 9:00~12:00
会 場	真珠の間 A
演 者	医療法人仁恵会 佐伯保養院・山内 勇人先生、梶原診療所・平原 佐斗司先生、愛媛大学大学院医学系研究科脳とこころの医学・谷向 知先生、医療法人社団こだま会 こだまクリニック・木之下 徹先生、公益社団 認知症の人と家族の会・高見 国生先生、認知症介護研究・研修東京センター・永田 久美子副部長、社会福祉法人ロザリオの聖母会 海上療養所・上野 秀樹先生
企画趣旨	<p>シンポジウム企画にあたり、「認知症治療薬が多数発売される中、薬で先延ばしするだけの治療ではなく、避けられない老化や死とどう向き合っていくかを考えたい」との趣旨を永井会長より頂戴しました。小医自身、精神科医・内科医として日々認知症診療に携わりながら、「現在の認知症診療の多くは、本人不在で介護者主体の診療形態が主であり、告知もままならず、丁度、20 年前のガン治療に良く似ている」と感じ、地域住民への疾患啓発に取り組んでいます。4 疾病時代のガンのように、認知症も正しい疾患啓発をしっかりと行っていくことで、疾患への理解が進み、きちんとした告知が行え、早期発見・早期治療、本人主体型の医療が可能となるものと思います。中島孝先生(国立病院機構新潟病院)は、「本来、緩和ケア、難病ケアにおける告知の目的は、患者の信頼関係を作ることにある」と述べられています。説明しづらい良くない話を相手の心をおもいやりながら工夫しながら知らせる過程で、医療従事者は患者から信頼を得ていきます。不可逆的に悪化していく病態に対して適切な援助を継続するためには、患者・ご家族との信頼関係が不可欠であり、だからこそ告知は重要なのです。不可逆的に進行していく認知症においても、告知の一番の目的は、「死の受容」や「疾患の受容」ではなく、患者・家族との信頼関係のもとで、認知症になっても人は生きている限り適切なケアが受けられ、幸福に過ごせるはずだという価値の共有にあるはずです。避けられない病態の進行、老化や死としっかり向き合いながら、治せないことを共有した上で、亡くなるまでどう生きるかをご本人・ご家族と一緒に考えていくことが大切ではないでしょうか。平成 25 年度以降の医療計画に記載すべき疾患に、精神疾患を追加した「5 疾病 5 事業」が盛り込まれることが決まり、認知症医療は新たな局面を迎えています。平成 24 年 6 月 18 日には厚生労働省認知症施策検討プロジェクトチームによる「今後の認知症施策の方向性について」が出され、その中で過去 10 年間の認知症施策を「反省」し、「認知症の人は、精神病院や施設を利用せざるを得ない」という考え方を改め、「認知症になっても本人の意思が尊重され、できる限り住慣れた地域の良い環境で暮らし続けることができる社第 15 回 日本在宅医学会大会 プログラム別 詳細情報会」の実現を目</p>

第15回 日本在宅医学会大会 プログラム別 詳細情報

指すための方向性が述べられております。そのような中、本シンポジウムは非常にタイムリーな内容であり、座長・演者には、認知症の人やご家族の生き方に向き合う支援をすでに実践されている本邦の第一人者の先生方や、家族会の方をお迎えしております。すでに認知症高齢者は現時点で 300 万人を超え、65 歳以上の 1 割を占めています。高齢になるほど認知症罹患率は増えることから、急激な高齢化や疾患啓発に伴い、今後著増する認知症高齢者への支援のあり方は本邦の社会保障を大きく左右します。本会が認知症当事者やご家族、そして地域に対して、認知症支援における在宅医療の役割を再確認し、深め合える場になれば幸いです。